九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

認知症患者の歯科治療に関する対応法の検討

湯川, 綾美

https://hdl.handle.net/2324/4110467

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（臨床歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式６－２）

氏　　名	湯川　綾美
論　文　名	認知症患者の歯科治療に関する対応法の検討
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　柏﨑　晴彦 副　査　　九州大学　　教授　　築山　能大 副　査　　九州大学　　准教授　荻野　洋一郎

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

超高齢社会を迎えた日本では認知症患者の増加に伴い、歯科医療やケアの実施が困難となる患者が増加している。歯科医療従事者は認知症患者を理解し、患者それぞれの状態に配慮した歯科治療、口腔管理を継続的に提供することが重要である。本研究では、急性期、維持期の病院に入院した多障害および多疾患を抱え、口腔機能が低下した認知症高齢者を対象として、歯科治療に必要な対応法について検討した。

第１章：認知症を合併した舌癌の高齢患者に対し、術前より包括的ケア技法を取り入れた周術期口腔機能管理を通して経口摂取支援を行い、良好に経過した症例を経験したので報告する。患者は 67 歳男性、舌・口底癌（T4aN2M0）の診断の下、腫瘍切除術及び再建術が計画された。脳梗塞の既往があり、左上下肢の軽度麻痺及び認知機能低下が認められた。術前より周術期口腔機能管理を行い、術後は嚥下調整食の一部経口摂取をゴールとした摂食嚥下リハビリテーション（以後リハ）を行った。リハ中は認知症患者への包括的ケア技法を取り入れ、退院時には設定したリハのゴールを達成し、回復期病院転院後も口腔機能リハを積極的に継続することができた。口腔癌術後に口腔機能が低下した認知症患者においても急性期から適切にリハを行い、経口摂取を維持することで良好に経過できることが示唆された。

第２章：脊髄小脳変性症（SCD）は、歩行時のふらつき、手の震え、言語に影響する進行性神経疾患である。重度フレイルの SCD 患者に対し、義歯調整後に ADL の顕著な改善がみられた症例を報告する。患者は 81 歳男性、既往歴は SCD、アルツハイマー型認知症。維持期病院歯科初診時には寝たきり状態の重度フレイルであり、一部介助でペースト食を摂取していた。無歯顎だが義歯不適合のため義歯は使用していなかった。そこで両側性平衡咬合を付与するリマウント調整法を用いて口腔外で義歯調整を行い、多職種連携でリハを継続した。その結果、著明な ADL の改善が認められ、3 ヶ月で介助なしでの食事ができるまでになった。口腔機能障害の改善後に行われる適合の良い義歯を装着してのリハは、特に良好な結果を得られる可能性がある。本症例で行ったリマウント調整法は、口腔内での義歯調整が困難な高齢患者に効果的であることが示唆された。今後、認知症患者の数は増加すると推計されているが、今回行った認知症患者に対する包括的ケア技法による対応法と、口腔外での義歯調整であるリマウント調整法は、今後の歯科における認知症患者に対する対応法として有効であると示唆された。

以上のように、本論文は認知症患者の歯科治療における対応法に関する新知見を呈している。従って、博士（臨床歯学）の学位授与に値する。